夏目漱石の用字法
－「イイ･ヨイ」を中心に－

青木浩之*
hiaoki@hanmail.net

<目次>

1. はじめに
2. 先行研究
3.『イイ・ヨイ」の表記の様相
3.1 雑誌掲載作品5篇
3.2 新聞掲載作品10篇 －小説－
3.3 新聞掲載作品2篇 －随筆－
4. おわりに

主題語: 夏目漱石(Natsume Soseki)、用字法(rules for using Kanjis and Hiragana letters)、振り仮名(Kana above Kanji showing the pronuncistion)、雑誌掲載作品(magazine publication works)、新聞掲載作品(newspaper publication works)

1. はじめに

本稿では、明治の文豪で今なお時代を超えた人気のある夏目漱石の主要作品17篇を選び、その用字法について述べることにする。特に作品全般にわたって数多く使用され、漢字表記の面でも多様な同語異字の表記が見られる「イイ・ヨイ」を取り上げて考察する。

漱石の用字法、特に振り仮名表記の量に関し特徴的なのは、雑誌掲載作品群と新聞掲載作品群との間に顕著な差があるということである[1)]。したがって本稿でも漱石の作品を2種に分け、また後者の新聞掲載作品群では小説と随筆という表現形態の違いも考慮して区分し、全3種の作品群に関して「イイ・ヨイ」の表記の様相を見ていくことにする。

* 東明大學校 教養教育院 助教授

1) 京極興一(1994)『夏目漱石の字音仮名遣い』上田女子短期大学国語国文学会

2. 先行研究

漱石の用字法に関しては、石川禎紀[2]が主要9作品を取り上げ、一般に「あて字」とされているもののほかに表記法の揺れにも言及し、漱石の用字法を考察している。106の単語を選び、それぞれに検討を加えているが、概略的なものにとどまっている。

橋浦兵一[3]は『こゝろ』を取り上げ、約20種の外来語表記と、同義異形の漢字や特殊ルビについてどのようなものが作品に表れているのか、その用例数と併せて示している。本稿で考察する「イイ・ヨイ」に関して、「イイ」では「宜い・善い・可い・好い」を、「ヨイ」では「可い」をそれぞれ例文と用例数を提示することで終わっている。

漱石に限らず近代日本語の用字法に関しては近藤瑞子[4]が詳細に論じている。「イイ・ヨイ」への言及はないが、形容詞では「アカイ・クライ・ツライ・ワカイ」に関して作家別時代別に表記の多様性を述べている。

3.「イイ・ヨイ」の表記の様相

漱石の百編以上に及ぶ作品の中から、本稿では短編・小品等を除いた主要中長編小説15編と随筆2篇を考察する。具体的には『吾輩は猫である』(明治38年1月-明治39年8月)から『野分』(明治40年1月)に至る雑誌掲載[5]作品5篇と、『虞美人草』(明治40年6月-10月)から『明暗』(大正5年5月-12月)までの新聞掲載[6]の小説10篇、そして新聞に掲載された随筆『思ひ出す事など』(明治43年10月-明治44年4月)と『硝子戸の中』(大正4年1月-2月)である。これらの作品の「イイ・ヨイ」の表記に使われた漢字を概観すると、次の表のようになる[7]。

---

2) 石川禎紀(1973)「夏目漱石の用字法」『言語生活』261号
3) 橋浦兵一(1988)「夏目漱石「こころ」の漢字表記およびその背景」明治書院
4) 近藤瑞子(2001)『近代日本語における用字法の変遷-尾崎紅葉を中心に-』翰林書房
5) 『吾輩は猫である』『坊っちゃん』『野分』は『ホトトギス』に、『草枕』は『新小説』に、そして『二百十日』は『中央公論』に各々掲載された。
6) 後述の随筆を含め12篇全て『朝日新聞』に掲載された。当時の朝日新聞の紙面は総ルビである。
7) 国立国会図書館デジタルコレクションの『漱石全集』漱石全集刊行会)のテキストに準拠した。

	好	善	宜	能	可	良	佳	快	癒
吾輩は猫である	○	○	○	○	×	○	×	○	×
坊っちゃん	○	○	○	×	×	×	×	×	×
草枕	○	○	×	×	×	×	×	×	×
二百十日	○	○	×	×	×	×	×	×	×
野分	○	○	×	×	×	○	×	×	×
虞美人草	○	○	○	○	○	×	×	×	×
坑夫	○	○	○	○	○	×	×	×	×
三四郎	○	○	○	○	○	×	○	×	×
それから	○	○	○	○	○	○	×	×	×
門	○	○	○	○	○	○	×	×	×
彼岸過迄	○	○	○	○	○	×	○	×	×
行人	○	○	○	○	○	○	×	×	×
こゝろ	○	○	○	○	○	×	×	×	○
道草	○	○	○	○	○	×	×	×	×
明暗	○	○	○	○	○	○	×	×	×
思ひ出すことなど	○	○	×	○	○	×	×	×	×
硝子戸の中	○	○	○	○	○	×	×	×	×

近代日本語の特徴の一つである、漢字表記と振り仮名における多様な異字形[8]がここにも見られる。ただ、雑誌掲載作品と新聞掲載作品との間に歴然とした差があり、後者により多くの漢字が使われていたことがわかる。後者の小説と随筆においては、用字の目立った大きな差は見られない。次に３種に分けた項目ごとに「イイ・ヨイ」の表記の様相を考察していく。

3.1 雑誌掲載作品5篇

5篇を代表して最初の作品『吾輩は猫である』から表記の例を見てみる。

(1)　御馳走(ごちそう)を食(く)ふよりも寝(ね)て居た方(ほう)が気楽(きらく)でいい。　(p.23)

8) 李(2004：222)では「一語多表記、多語一表記」と命名し漢字表記と振り仮名について論じている。

(2)　一番心持の好いのは夜に入ってここのうちの小供の寝床へもぐり込んで　(p.10)

(3)　是から先どうして善いか分分らない。　(p.7)

(4)　「御師匠さんに買って頂いたの、宜いでせう」　(p.49)

(5)　「少しは胃の加減が能いんですか」　(p.121)

(6)　「どうも良い心持だ」　(p.264)

(7)　しばらくはよい心持に座って居つたが、　(p.6)

(8)　どうしたら好からうと考へて好い智慧が出ない時は、　(p.254)

(9)　「其学生が又馬鹿に記憶の善い男で、」　(p.24)

(10)　嘘でも何でも、いい加減な事を答へてくれれば宜いと思つて居るのに　(p.228)

(11)　「能く真面目であんな嘘が付けますねえ」　(p.142)

(12)　小供の布団の裾へ廻って心地快く眠る。　(p.213)

用例(1)から(6)までは「イイ」に関する表記で、(1)ではひらがなが、(2)から(6)までは「好」「善」「宜」「能」「良」の5つの漢字が使われている。用例(7)から(12)までは「ヨイ」に関する表記であり、(7)ではひらがなが、(8)から(12)までは「好」「善」「宜」「能」「快」の5つの漢字が使われている。漱石が『吾輩は猫である』で「イイ・ヨイ」を多彩な用字法で表していることがわかる。なお、(12)の「快」は今回調査した17作品で唯一の例である。

次にこれらの用字をどれほどの比重で表したのか、「イイ・ヨイ」の表記及び用例数をまとめると、次の表のようになる。

表記		イイ		ヨイ	
		用例数	比率	用例数	比率
ひらがな		308	77.38	208	80.31
漢字	好	53	13.32	9	3.47
	善	22	5.53	27	10.42
	宜	12	3.02	6	2.32
	能	2	0.50	8	3.09
	良	1	0.25	0	0
	快	0	0	1	0.39
全体		398	100	259	100

「イイ」も「ヨイ」もひらがなの使用が80％前後あり数的には圧倒的優位にあり、漢字表記では「イイ」は「好」が、「ヨイ」は「善」が10％以上の使用例が見られ、他の漢字に比べ使用上の偏重がある。

『吾輩は猫である』は全11話からなるが、前半の6話までと後半の7話からとでは用字上の際立った差が見られる。用例数と比率の各々左側が前半、右側が後半である。

表記		イイ				ヨイ			
		用例数		比率		用例数		比率	
ひらがな		93	215	52.25	97.73	98	110	70.00	92.44
漢字	好	48	5	26.97	2.27	8	1	5.71	0.84
	善	22	0	12.36	0	21	6	15.00	5.04
	宜	12	0	6.74	0	6	0	4.29	0
	能	2	0	1.12	0	6	2	4.29	1.68
	良	1	0	0.56	0	0	0	0	0
	快	0	0	0	0	1	0	0.71	0
全体		178	220	100		140	119	100	

前半までは漢字が「イイ」では50％近く「ヨイ」では30％使われていたのが、後半になると両者とも10％以下という急な変化が見られる。『吾輩は猫である』は明治38年1月から明治39年8月まで断続的に雑誌「ホトトギス」に連載されたが、その後半部分に該当する時期、明治39年4月に『坊っちゃん』が執筆・発表されている。この変化は『坊っちゃん』の影響のためなのかは研究が待たれるが、その後の『草枕』から『野分』までひらがな過多使用の基調が続いているのは、次の一連の表を見れば明らかである。

『坊っちゃん』

表記		イイ		ヨイ	
		用例数	比率	用例数	比率
ひらがな		119	91.54	74	93.67
漢字	好	9	6.92	1	1.27
	善	2	1.54	1	1.27
	宜	0	0	3	3.79
全体		130	100	79	100

『草枕』

表記		イイ		ヨイ	
		用例数	比率	用例数	比率
ひらがな		70	88.61	48	88.89
漢字	好	8	10.13	1	1.85
	善	1	1.26	5	9.26
全体		79	100	54	100

『二百十日』

表記		イイ		ヨイ	
		用例数	比率	用例数	比率
ひらがな		48	75.00	16	88.89
漢字	好	16	25.00	0	0
	善	0	0	2	11.11
全体		64	100	18	100

『野分』

表記		イイ		ヨイ	
		用例数	比率	用例数	比率
ひらがな		146	90.12	45	97.83
漢字	好	15	9.26	0	0
	善	0	0	1	2.17
	良	1	0.62	0	0
全体		162	100	46	100

ひらがなの使用が圧倒的に多くなり、用例数の比較的多い『坊っちゃん』と『野分』では『吾輩は猫である』の後半部分と同様90％以上であり、「イイ」も「ヨイ」も用例数がともに百以下の『草枕』と『二百十日』でも70％台半ばから90％近くになる。このひらがなの多用が、その後の新聞掲載作品と著しく異なり、この時期の作品の特徴とも言える。

また使用された漢字を見ると、5つの作品(『吾輩は猫である』は後半部分)は共通して「好」と「善」が主流であったことがわかる。これ以外の漢字が使われたのは次の3例しかない。

(13) 何だか見た様な顔だと思つて能く能く観察すると、　(『吾輩は猫である』p.457)

(14) おれはどうでもするが宜からうと返事した。　(『坊っちゃん』p.257)

(15) 「なに良い先生なんだよ。」　(『野分』p.329)

『坊っちゃん』では(14)以外に「宜かつた」と「宜う御座います」の2例の「宜」が見られる。「能」と「宜」はその後の新聞掲載作品で多用されており、いわばその前兆とも言える使用例である。「良」は17作品の中で5作品に1度ずつ5例単発的に見られるだけである。現代文で「イイ・ヨイ」を表す漢字は通常「良」が使われている9)のと比べると、極めて少ない用字だと言える。

3.2 新聞掲載作品10篇 －小説－

ここでは『三四郎』を取り上げて表記の例を見ていくことにする。『三四郎』は漱石が職業作家として朝日新聞に連載を始め、新聞連載の長編小説としては3作目である。前二作の『虞美人草』と『坑夫』では雑誌掲載作品の基調がまだ残っていて、ひらがなの使用が比較的多く、漢字の使用においても新聞掲載作品10)としての特徴が十分に現れていない。そういう意味でも本格的な新聞掲載作品として『三四郎』を考察する。

(16) 「電車に乗るがいい」と与次郎が云つた。　(p.52)

(17) 額が御光さんの様にだだつ広くない。何となく好い心持に出来上つてゐる。　(p.6)

(18) 小供の玩具は矢張広島より京都の方が安くつて善いものがある。　(p.6)

(19) 「丁度宜い時分に、本名を名名乗つて出る」　(p.182)

(20) 流石に理学者は根気の能いものだと感心した。　(p.275)

(21) 「僕の書斎にある本は何でもでも読んで可いです」　(p.49)

---

9) 例えば、国内外で評価の高い小説家、翻訳家、またエッセイストでもある村上春樹の作品を取り上げると、2013年に刊行された最新の長編小説『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』では「イイ・ヨイ」が全部で421例見られる。ひらがなの使用は「イイ」が180例(42.8％)であり、「ヨイ」が170例(40.4％)である。漢字は「良」と「善」だけ使用され、「良」が68例(16.1％)、「善」が3例(0.7％)見られ、ほとんど「良」が使われている。

10) この項目(3.2)で言及している新聞掲載作品とは全て小説のことである。

(22)「奥さんでも御貰になる御考へはないんでせうか」

「あるかも知れない。佳いのを周旋して遣り玉へ」　(p.213)

(23) もう一返よし子の室へ後戻りをして、案内すればよかつた。残念な事をした。　(p.82)

(24) 湯から出る迄待つて居れば好かつたと思つたが、仕方がない。　(p.12)

(25) 紬の羽織では何だか安つぽい受附の気がする。

制服を着て来れば善かつたと思つた。　(p.254)

(26)「もう気分は宜くなりましたか。宜くなつたら、そろそろ帰りませうか」　(p.213)

(27)「それから池の端で……」と女はすぐ云つた。能く覚えてゐる。　(p.112)

(28) 思ひ切つてもう少し行つて見ると可かつた。けれども恐ろしい。　(pp.16-17)

(29)「ぢや細君も試みに持つて見たら好からう」

「大に佳しとか何とか言かも知しれない」　(p.99)

用例(16)から(22)は「イイ」に関する表記であり、(16)ではひらがなが、(17)から(22)までは「好」「善」「宜」「能」「可」「佳」の6つの漢字が使われている。用例(23)から(29)までは「ヨイ」に関する表記であり、(23)ではひらがなが、(24)から(29)までは「イイ」と同様の「好」「善」「宜」「能」「可」「佳」の6つの漢字が使われている。このように「イイ・ヨイ」においてともに6種類の漢字が使われているのは、17作品中『三四郎』だけであり、最も多くの漢字を使用し「イイ・ヨイ」を表していたことがわかる。

新聞掲載作品の特徴として(19)の「可い」が初めて、(27)の「能く」が本格的に使われたということである。前述したように「能く」は『吾輩は猫である』の後半部分に2例見られるだけである。(22)と(29)の「佳」は『彼岸過迄』にも見られるが、それは作品説明の序文においてであり、小説の本文としては『三四郎』で唯一使われた。

次にこれらの用字をどれほどの比重で表したのか、「イイ・ヨイ」の表記及び用例数をまとめると、次の表のようになる。

『三四郎』

表記		イイ		ヨイ	
		用例数	比率	用例数	比率
ひらがな		12	6.90	44	32.35
	好	108	62.07	28	20.59
	善	3	1.72	16	11.76
	宜	5	2.88	5	3.68
	能	1	0.57	31	22.79
	可	44	25.29	11	8.09
	佳	1	0.57	1	0.74
全体		174	100	136	100

ひらがなの使用が特に「イイ」で極端に少なく10％以下であり、「ヨイ」では30％を少し越えるくらいで、雑誌掲載作品とは大きな違いを示している。これはその後発表された作品でもその基調は続いている。

使用された漢字を見ると、「好」が特に「イイ」で際立っており、『三四郎』に限らず、ここに取り上げた17作品全般でよく使われている。「可」は「イイ」での多用が注目すべき点であり、「能」は「ヨイ」において最多の漢字使用を示している。「能」の「ヨイ」での多用は新聞掲載作品全般に見られ、この時期の作品の特徴だと云える。

では、他の作品の用字の比重についても見ていくことにする。

『虞美人草』

表記		イイ		ヨイ	
		用例数	比率	用例数	比率
ひらがな		122	39.10	66	48.89
漢字	好	184	58.98	36	26.68
	善	3	0.96	9	6.66
	宜	2	0.64	9	6.66
	能	0	0	14	10.37
	可	1	0.32	1	0.74
全体		312	100	135	100

『坑夫』

表記		イイ		ヨイ	
		用例数	比率	用例数	比率
ひらがな		64	48.12	67	62.04
漢字	好	61	45.86	24	22.22
	善	3	2.26	9	8.33
	宜	1	0.75	3	2.78
	能	0	0	5	4.63
	可	4	3.01	0	0
全体		133	100	108	100

これら2作品は、漱石が新聞掲載の小説として初めて書いた作品とその次のものである。ひらがなの使用を見ると、雑誌掲載作品の90％前後というほど高くないが、『三四郎』以降の作品の「イイ」の10％以下や「ヨイ」の30％前後よりは高いという、過渡期的性格を示している。「イイ」における「可」や「ヨイ」の「能」の使用、特に「能」において10％かそれ以下しか使われておらず、用字の面で雑誌掲載と新聞掲載の中間的傾向の作品だと見ることができる。

『それから』

表記		イイ		ヨイ	
		用例数	比率	用例数	比率
ひらがな		6	3.39	55	32.55
	好	132	74.58	33	19.53
	善	0	0	18	10.65
	宜	5	2.82	8	4.73
	能	1	0.57	30	17.75
	可	33	18.64	24	14.20
	良	0	0	1	0.59
全体		177	100	169	100

『門』

表記		イイ		ヨイ	
		用例数	比率	用例数	比率
ひらがな		4	3.74	32	28.83
	好	63	58.88	35	31.53
	善	0	0	3	2.70
	宜	0	0	2	1.80
	能	0	0	23	20.72
	可	39	36.45	16	14.42
	良	1	0.93	0	0
全体		107	100	111	100

『彼岸過迄』

表記		イイ		ヨイ	
		用例数	比率	用例数	比率
ひらがな		7	3.63	35	25.93
	好	125	64.77	31	22.96
	善	3	1.55	6	4.44
	宜	4	2.07	9	6.67
	能	0	0	40	29.63
	可	53	27.46	14	10.37
	佳	1	0.52	0	0
全体		193	100	135	100

『行人』

表記		イイ		ヨイ	
		用例数	比率	用例数	比率
ひらがな		5	2.42	57	32.76
	好	186	89.86	40	22.99
	善	1	0.48	6	3.45
	宜	11	5.31	8	4.60
	能	0	0	56	32.18
	可	3	1.45	7	4.02
	良	1	0.48	0	0
全体		207	100	174	100

『こゝろ』

表記		イイ		ヨイ	
		用例数	比率	用例数	比率
ひらがな		5	4.96	53	38.13
	好	72	71.39	28	20.14
	善	4	3.97	0	0
	宜	1	0.90	4	2.88
	能	0	0	41	29.50
	可	18	17.88	13	9.35
	癒	1	0.90	0	0
全体		101	100	139	100

『道草』

表記		イイ		ヨイ	
		用例数	比率	用例数	比率
ひらがな		7	4.83	53	38.41
漢字	好	134	92.41	27	19.57
	善	0	0	1	0.72
	宜	1	0.69	1	0.72
	能	0	0	55	39.86
	可	3	2.07	1	0.72
全体		145	100	138	100

『明暗』

表記		イイ		ヨイ	
		用例数	比率	用例数	比率
ひらがな		14	3.95	80	31.74
漢字	好	138	38.87	15	5.95
	善	1	0.28	3	1.19
	宜	1	0.28	4	1.59
	能	0	0	108	42.86
	可	200	56.34	42	16.67
	良	1	0.28	0	0
全体		355	100	252	100

これら7作品のひらがなの使用に関しては前述した通りである。「イイ」での「可」の使用は起伏が見られる。『行人』と『道草』はかなり低く、ともに3例しか使われていない。反面、『道草』の後に執筆された『明暗』では、「イイ」では通常一番多く使われる「好」以上の60％近い使用が見られ、対照的である。「ヨイ」では「能」の使用が多く、『それから』と『門』以外の作品では「好」以上の最多の使用である。特に『明暗』での比重が最も高く、「イイ」における「可」と同様、これらの用字において頂点を示している。なお『こゝろ』で使用された「癒」は、17作品で唯一の例であり、次のように使われている。

(30) 彼は「病気はもう癒いのか、…」と聞きました。　(『こゝろ』p.316)

3.3 新聞掲載作品2篇 －随筆－

新聞掲載作品中2篇は随筆であり、その両作品から表記例を見ていく。

(31) 妻君は品のいい静かな女であつた。　(『思ひ出す事など』p.265)

(32) 実を云ふと其善悪などは寧ろ何でも好いと迄思つてゐる。　(『同上』p.247)

(33) それから又善い人を少しでも傷けたくない。　(『硝子戸の中』p.594)

(34) 「女の死ぬ方が宜いと御思ひになりますか」　(『同上』p.516)

(35) ああ早く夜が明けて呉れれば可いのに思つた。　(『思ひ出す事など』p.306)

(36) 医者の許可を得たのだから、…見たらよからうと余は弁解した。　(『同上』p.244)

(37) 病中の日記を検べて見ると…「好い本を読んだと思ふ」と…　(『同上』p.242)

(38) 白い着物を着てゐる女は余の心を善く悟つた。　(『同上』p.289)

(39) 足は能く寝覚めの種となつた。　(『同上』p.289)

(40) 何の奇もなく、何の新もないと云つて可い。　(『同上』p.244)

用例(31)から(35)は「イイ」に関する表記であり、(31)ではひらがなが、(32)から(35)までは「好」「善」「宜」「可」の4つの漢字が使われている。用例(36)から(40)までは「ヨイ」に関する表記であり、(36)ではひらがなが、(37)から(40)までは「好」「善」「能」「可」の4つの漢字が使われ

ている。前述した『三四郎』と比べると、漢字の使用が3分の2に減っている。

次にこれらの用字をどれほどの比重で表したのか、「イイ・ヨイ」の表記及び用例数をまとめると、次の表のようになる。

『思ひ出す事など』

表記		イイ		ヨイ	
		用例数	比率	用例数	比率
ひらがな		1	5.26	17	43.59
漢字	好	15	78.95	9	23.08
	善	0	0	1	2.56
	能	0	0	4	10.26
	可	3	15.79	8	20.51
全体		19	100	39	100

『硝子戸の中』

表記		イイ		ヨイ	
		用例数	比率	用例数	比率
ひらがな		2	5.13	30	54.55
漢字	好	35	89.75	4	7.27
	善	1	2.56	0	0
	宜	1	2.56	0	0
	能	0	0	20	36.36
	可	0	0	1	1.82
全体		39	100	55	100

ひらがなの使用を見ると、「イイ」では10％以下であり『三四郎』以降の新聞掲載作品の基調が続いているが、「ヨイ」は40％から50％台と、雑誌掲載と新聞掲載の中間的傾向の『虞美人草』や『坑夫』に近い。「イイ」における「可」の使用を見ると、『思ひ出す事など』は15％台と、新聞掲載作品の性格を帯びているが、『硝子戸の中』では使われておらず、雑誌掲載作品と同様である。「ヨイ」での「能」を見ると、『思ひ出す事など』は10％台と低く『虞美人草』に近い。『硝子戸の中』は30％台であり、新聞掲載作品の基調を保っている。

これら2作品の「イイ・ヨイ」の用字法は、今回検討した15作の小説の傾向を全て部分的に

表したものと言える。

4. おわりに

本稿では夏目漱石の主要作品17篇を取り上げ「イイ・ヨイ」を中心に用字法を考察した。漱石は「イイ・ヨイ」をひらがなと9つの漢字を使って表しているが、何で発表したのか、雑誌か新聞なのか、またどう表現したのか、小説か随筆なのかによって、「イイ・ヨイ」の表記に違いが見える。その違いは次の通りである。

(1) 雑誌掲載作品5篇は、『吾輩は猫である』の前半(6話まで)を除いて、ひらがなの使用が圧倒的に多く、70％半ばから90％台後半までの使用が見られる。漢字の使用は「好」と「善」が主流である。

(2) 新聞掲載作品12篇の中で、最初に書かれた2作『虞美人草』と『坑夫』は、ひらがなの使用において、また新聞掲載作品を特徴づける「可」と「能」の使用、特に「能」において、雑誌掲載作品と新聞掲載作品の中間的性格を帯びている。

(3) 新聞に掲載された『三四郎』以降の8つの小説では、ひらがなの使用が「イイ」では10％以下であり「ヨイ」でも30％前後と、雑誌掲載作品よりかなり少なくなっている。漢字の使用では、「イイ」における「可」では作品ごとに使われ方に起伏が見られるが、「ヨイ」での「能」では通常多用される「好」よりも多く使われた作品も見られるほど高い比重の使用が特徴的である。

(4) 新聞に掲載された2つの随筆は、ひらがなの使用において「イイ」では(3)の作品群と似ており、「ヨイ」では(2)の作品群に近い。漢字の使用を見ると、「イイ」における「可」では『思ひ出す事など』は(3)の作品群に近く、『硝子戸の中』は(1)の作品群と同じである。「ヨイ」における「能」では『思ひ出す事など』は(2)の作品群に近く、『硝子戸の中』は(3)の作品群の基調を有している。このようにこれら2作品は、今回検討した15の小説の傾向を全て部分的に有するものと見ることができる。

【参考文献】

李京珪(2004)「명치기 번역소설에 나타나는 한자표기와 후리가나에 관한 연구-内田魯庵訳『小説罪と罰』의 人称詞를 중심으로-」『日本学報』第61輯 1巻、韓国日本学会
石川禎紀(1973)「夏目漱石の用字法」『言語生活』261号
京極興一(1994)「夏目漱石の字音仮名遣い」上田女子短期大学国語国文学会
近藤瑞子(2001)『近代日本語における用字法の変遷-尾崎紅葉を中心に-』翰林書房
西田直敏(2003)「夏目漱石『吾輩は猫である』の表現とレトリック」『甲南女子大学研究紀要』第39号
橋浦兵一(1988)「夏目漱石「こころ」の漢字表記およびその背景」明治書院
森岡健二(1983)「明治期における漢字の役割」『言語生活』6月号

【資料】
『漱石全集第一巻(吾輩は猫である)』(漱石全集刊行会1936)、国立国会図書館デジタコレクション
『漱石全集第二巻(坊っちゃん、草枕)』(漱石全集刊行会1917)、国立国会図書館デジタコレクション
『漱石全集第三巻(二百十日、野分)』(漱石全集刊行会1936)、国立国会図書館デジタコレクション
『漱石全集第四巻(虞美人草、坑夫)』(漱石全集刊行会1935)、国立国会図書館デジタコレクション
『漱石全集第五巻(三四郎、それから)』(漱石全集刊行会1936)、国立国会図書館デジタコレクション
『漱石全集第六巻(門、彼岸過迄)』(漱石全集刊行会1936)、国立国会図書館デジタコレクション
『漱石全集第七巻(行人)』(漱石全集刊行会1937)、国立国会図書館デジタコレクション
『漱石全集第八巻(こころ、道草)』(漱石全集刊行会1935)、国立国会図書館デジタコレクション
『漱石全集第九巻(明暗)』(漱石全集刊行会1937), 国立国会図書館デジタコレクション
『漱石全集第十巻(硝子戸の中)』(漱石全集刊行会1936)、国立国会図書館デジタコレクション
『漱石全集第13巻(思ひ出す事など)』(漱石全集刊行会1928)、国立国会図書館デジタコレクション
村上春樹(2013)『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』文芸春秋

논문투고일 : 2016년 09월 20일
심사개시일 : 2016년 10월 18일
1차 수정일 : 2016년 11월 04일
2차 수정일 : 2016년 11월 09일
게재확정일 : 2016년 11월 15일

〈要旨〉

夏目漱石の用字法

－「イイ・ヨイ」を中心に－

青木浩之

本稿では夏目漱石の主要作品17篇を取り上げ「イイ・ヨイ」を中心に用字法を考察した。漱石は「イイ・ヨイ」をひらがなと9つの漢字を使って表しているが、雑誌掲載か新聞掲載なのか、また小説か随筆なのかによって、「イイ・ヨイ」の表記に違いが見える。その違いは次の通りである。

(1) 雑誌掲載作品5篇は、『吾輩は猫である』の前半(6話まで)を除いて、ひらがなの使用が圧倒的に多い。漢字の使用は「好」と「善」が主流である。

(2) 新聞掲載作品12篇の中で、最初に書かれた2作『虞美人草』と『坑夫』は、ひらがなの使用において、また新聞掲載作品を特徴づける「可」と「能」の使用、特に「能」において、雑誌掲載作品と新聞掲載作品の中間的性格を帯びている。

(3) 新聞に掲載された『三四郎』以降の8つの小説では、ひらがなの使用が雑誌掲載作品よりかなり少なくなっている。漢字の使用では、「イイ」における「可」では作品ごとに使われ方に起伏が見られるが、「ヨイ」での「能」では通常多用される「好」よりも多く使われた作品も見られるほど高い比重の使用が特徴的である。

(4) 新聞に掲載された2つの随筆は、ひらがなと漢字の使用の局面において(1)から(3)の作品群と似様相を示しており、今回検討した15の小説の傾向を全て部分的に有するものと言える。

Natsume Soseki's Rules for using Kanjis and Hiragana letteres

－Centering on "II or YOI (good)"－

Aoki, Hiroyuki

I took up major 17 works of Soseki Natsume in this report and considered rules for using Kanjis and Hiragana letters centering on "II or YOI(good)." Soseki represented "II or YOI" using Hiragana letters and nine Kanjis. Differences are seen for the notation of "II or YOI" whether it is a magazine publication or a newspaper publication, and whether it is a novel or an essay. The differences are as follows.

(1) 5 magazine publication works were written mostly by using Hiragana letters except for the first half of(to six episodes) "I am a CAT." As for the use of Kanjis, "好 favorite" and "善 good" were mainly used.

(2) First two works "Gubijinso(The Poppy)" and "The Miner" among 12 works which were written in newspaper publication positioned between the magazine publication works and the newspaper publication works in the use of Hiragana letters, and also in the use of "可 passable" and "能 capable" which are typical of the newspaper publication works. Especially in the latter one.

(3) In 8 novels after "Sanshiro" placed in the newspaper, the use of Hiragana letters is much fewer than that of the magazine publication works. As for Kanjis "可" represented for "II" are used differently in each work, and "能" represented for "YOI" are used so much that the "能" of some works are used more than "好" which are usually most common in Soseki's works.

(4) Two essays placed in the newspaper show characteristics similar to the works mentioned from (1) to (3) partially in the use of Hiragana letters and Kanjis. It may be said that they have partially all the characteristics of 15 novels which I examined in this report.